

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第122号

令和3年1月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

清水寺成就院で勤王の公武を結んだ月照上人 安政の大獄を逃れ、錦江湾で西郷と入水

弟、信海上人が遺した正行への思い

● 月照、尊王運動の黒頭巾 ●

幕末の嘉永6年1853、ペリー来航を機に、幕府を取り巻く環境は一気に激変します。

井伊直弼は独断・専制で鎖国を解きます（開国派）。しかし、攘夷派の水戸藩や尊王攘夷派の長州藩、公武合体派の薩摩藩等と対立が激化します。

尊王攘夷の活動が大きくなることを懸念した井伊直弼は、弾圧を強化し、いわゆる安政の大獄が始まります。

この頃、京都清水寺成就院の住職であった月照上人は、成就院の支配下にあった関係から一条院（興福寺塔頭）門主、青蓮院の宮との厚誼を深めていきます。当時、青蓮院の宮は勤皇運動の総本山と目される人物でした。

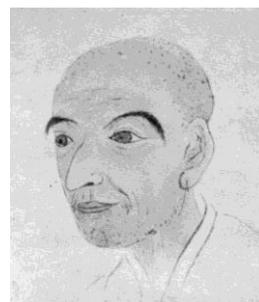
ために青蓮院の宮は、安政の大獄で蟄居を命じられますが、桜田門外の変によって井伊直弼失脚後は復権し、中川宮を名乗りました。

また、篤姫を養女にするなど、島津と縁戚関係にあった近衛忠熙は、月照の和歌の師匠でもありました。月照は、歌道入門を通じて個人関係に浄化し、近衛家と勤王の志士との仲立ち役を務めます。

もともと成就院は、公武の両面に広い祈壇を持っていたことから、月照は近衛の黒頭巾として、島津、水戸らをつなぐ役割を担ったのです。

その舞台となった成就院は、応仁の乱で全焼した清水寺再建のために建てられた本願院が前身で、堂々とした佇まいと幽閑な風趣を併せ持つ寺院で、明治の廃仏毀釈で行き場を失った石仏が多数運び込まれた千体石仏群があり、その石仏群の傍を通り過ぎると、「月の庭」で名高い成就院書院の玄関が現れます。

廊下が“鶯張り”であったことが密儀の場所として格好だったようで、近衛忠熙、青蓮院の宮、西郷隆盛、水戸藩士らが出入りし、密儀を重ね、彼らの黒子であった月照はもともと戒律主義であったことから勤王運動に傾注していったものと思われます。写真：人物叢書「月照」掲載月照肖像



● 西郷と公武をつないだ月照 ●

月照と西郷の接点を、人物叢書「西郷隆盛」田中惣五郎著より探ってみましょう。

將軍世継ぎ問題で一橋慶喜派と紀州慶福（後の家茂）派が対立する中、島津斉彬のもとで西郷隆盛は慶喜後継に動きます。この時、諸侯対策は、松平慶永―橋本佐内のラインで動き、京都対策が、近衛家―月照のラインでした。

幕末雄藩の幕府批判の構図は、京都在住の学者、梁川星巖・頼三樹三郎・梅田雲浜と交わり、指導を受ける関白鷹司政通の諸大夫小林民部、青蓮院の宮の家臣伊丹藏人・山田勘解由、近衛家の僧月照といった下層廷臣が活躍するというものでした。

水戸―橋慶喜を押し出すラインは「水戸―一橋―門（慶永）―外様雄藩（薩摩）」で、西郷の近衛へのつなぎ役は月照、そして近衛家の老女村岡でした。一方、紀州慶福を押し出すラインは「紀州―大奥―譜代大藩（彦根）・井伊直弼」でした。

この頃、西郷は朝廷から水戸家への密勅差出の使者を

務めています。この時、西郷は月照を通じてこの使命をかって出しています。また、水戸で密勅の受け取りが拒否されると、この時も、西郷は大封書を月照を通じて近衛家に返納させています。

そして、西郷は勅書の写しの有志諸藩への配布を提案しますが、この役を月照に依頼しているのです。西郷の動きの裏には、常に月照の存在があったのです。

しかし、安政5年1858、4月に井伊直弼が大老になると形勢が一変し、将軍世継ぎ問題は紀州家茂と決し、幕府による尾張、越前、水戸、一橋諸家への取り締まりが強化されるとともに、9月には、梅田雲浜が検挙されます。

西郷は、直も勅書を得て各藩に下ろうとしますが、情勢は緊迫していたのです。

近衛家では、月照への嫌疑が濃く、とらわれる危険ありと、西郷に、勅書写しの件は当方で動くので、月照を奈良へ匿ってほしいと依頼をします。

9月11日夜明けを待って、西郷、有村は月照を伴って奈良に向かいますが、既に街道筋にスパイが多く、西郷は月照を有村に託し薩摩へ落とすことにし、西郷は、京都へ戻っています。

9月24日、西郷は大坂から乗船し、9月30日に馬関に着きます。10月1日、西郷は単身で帰藩し、月照匿いを要請しますが、既に月照の人相書き手配に及び、月照は以下転々と逃避行を余儀なくされるのです。

馬関の薩摩屋、竹崎の白石正一郎邸、博多の藤井良節邸、福岡の高橋屋正助別邸、俳家斗丈翁の庵室、平尾の野村望東尼別荘を転々とし、月照は僕重助とともに鹿児島存竜院に入ります。

しかし、存竜院からの通報により藩の知るところとなり、藩は月照を俵屋に留置の上、11月15日、月照を日向の国境へ「永送り」（切り捨てること）と決定します。

「敬天愛人」を標榜する西郷隆盛、近衛忠熙の命を受け、同士でもあり敬愛する人でもある月照上人を死に追いやった自らの責を責め、死を覚悟し、この日夜半、西郷、平野、月照、僕重助の4人は船で錦江湾に漕ぎ出し、西郷は月照を抱きかかえるようにして入水したのです。

しかし、救助の甲斐あって西郷は息を吹き返しましたが、月照は帰らぬ人となりました。45歳。

《月照上人辞世の歌》

大君のためにはなにか 惜からむ
薩摩の迫門に 身は沈むとも

● 月照を失くし、生ある身を恥す西郷 ●

西郷は、大島渡海・沖永良部島獄舎投獄を経て、久光は薩摩藩の公武周旋のため西郷を赦免し召喚し、結果、慶応2年1866、尊王攘夷派の長州と公武合体派の薩摩が、薩長同盟を組み討幕運動へ乗り出します。

その後、征韓論に敗れ、下野した西郷は薩摩に帰り、

明治7年1874、月照17回忌に当たり、「月照墓前作」を詠み、明治10年1877、西南の役に敗れ、鹿児島に戻った西郷は、9月24日、城山洞窟で自刃をします。51歳。

【西郷南洲 月照墓前作】

相約て淵に投ず後先煮し 豈回らんや波上再生の縁
頭を回らせば十有余年の夢 空しく幽明を隔てて墓前に哭す
(意訳)

月照と互いに抱き合って錦江湾に身を投じたが、自分だけが生き残ってしまった。いかに運命とはいえ、思いもよらぬことであった。

思い起こせばあれからはや十四年の歳月が過ぎた。まるで夢のようである。あの世とこの世と住むところを異にして、相語り合いま見ゆることができないのは誠に残念なことで、悲しさに堪えず、墓前で嘆き叫ぶのである。

● 勤王の僧、信海 正行信奉の歌 ●

口月照の弟、信海上人

月照の後を継いで成就院の住職になったのが、弟の信海上人です。信海もまた、攘夷祈祷を行ったとして捕縛され、江戸で獄死をしています。41歳。

清水寺の北総門をくぐった先に、月照・信海・西郷の歌碑が並び立っています。

《信海上人辞世の歌》

西の海 あずまのそらと かわれども
ころはおなじ 君が代のため

信海上人は、正行辞世の歌を本歌取りした歌を遺しています。

末はまた よらざらめやは あざさろ
いとにしばし 引はなるとも

射る矢の如く、私たちの勤王の思いは離れていくように見えても、やがてはまた一つの思いになって実を結ぶことは間違いない、と勤王の思いを詠ったものです。

清水寺では、毎年、11月16

日、月照の忌日に月照、信海両上人の忌日法要「落葉忌」が行われています。

この色紙は、清水寺森清範貫主揮毫の信海上人詠で本会に贈られたもの。

(文責『四條驛補正行の会』代表 扇谷昭)

